



### フィンランドという選択肢 第45年度会長 平野宏司

欧州のハブ空港ヴァンターに最新エアバスA340が静かに滑り降りた。ここから首都ヘルシンキへは車で30分とかからない。すがすがしい空に映える白樺の緑を車窓から眺めながら、午後4時前の都心へバスを走らせる。意外に多い交通量にガイドの前田さんが「3時半には帰宅ラッシュが始まります。フィンランドでは、これからはプライベートの時間。ゴルフをしたり、家族でバーベキューをしたりして過ごします」と話す。

「森と湖の国」と呼ばれるフィンランドは国土のほとんどが森林で、湖の数は20万超とも。なるほど最大都市ヘルシンキでもところどころに緑豊かな公園があり、日の沈まない夜を楽しむ人達でいつまでも賑わう。郊外に目を移せば、どこまでも広がる森林の広さと深さに感動を通り越して畏敬を感じる。

日本人観光客は女性や新婚旅行が多い。「欧州への乗り継ぎの人がほとんどですから長期は珍しいですよ」と前田さんが語るも、こちらとて超短期滞在のためじっくり味わえるかどうか？でも、そんな心配はあっという間に吹き飛び、僕達はすぐにヘルシンキっ子になりきることができた。中央駅の露天でケースいっぱいラズベリーを買って皆でつまみ食い。アカデミア書店内にあるカフェ・アアルトでカハヴィ(コーヒー)とプッラ(デザートパン)を注文し、しばし談笑。ヤコブセンのアントチェアなど北欧デザインで統一されたこのカフェは、映画「かもめ食堂」でもロケシューティングされたところで空気感はヘルシンキそのもの。

午後6時。バルト海につながるフィンランド湾の洋上から水際の街やコテージを眺望するディナーに参加し、白夜の始まりを楽しむ。日が長い分、かえって切ないほどの太陽の偉大さを感じる。その後有志でバーに移動し、現地の人達に紛れ込んだのは翌日への助走。

2日目、ヘルシンキ大学で学んだのは環境対策以上に環境思想。広大なキャンパスで体感したのは、人と環境を取り持つ壮大な世界であったことを帰国後再認識。環境ビジネスのヒントでも、などと思いつきで参加していたら、そのあまりにミクロ的な視野に気づき場違いを恥じたはず。むしろ、環境についてのベースの哲学を獲得するには絶好の機会だったと確信。このセミナーに参加した価値は将来必ずあらわれる、と胸を張って、ボリュームマックスで言いたい。

フィンランドという選択肢とは、旅行の行き先の話なんかではなく、生き方のひとつとしての提案の話。カジュアルに言えばライフスタイル、はやり言葉ならばワーク・ライフ・バランス。でも、ここはOJBらしく、仕事を含めた生き方に思いをめぐらせてみたい。アメリカ型でやってきた僕達が、これから共に歩むパートナーのひとつとして北欧を選び、そのエッセンスを取り入れるメリットは大きい。

朝7時、港広場のマーケットでは出勤前のビジネスマン達がコーヒーと軽い食事で穏やかな1日の始まりを迎える。買い物は必要最小限で、ちいさな野菜ひとつをもってレジに並ぶ人も少なくない。質素だが心が豊かだからデザインやDIYを楽しむゆとりもあり。家族とたっぷり時間を過ごしなが、国際競争力は高い。世界トップクラスの教育、先進国と渡り合う経済、女性に参政権をいち早く認め、大統領にも選出した政治、そして広大な自然。OJBのメンバーが、未来に続く企業を目指しているならば、参考になることがいっぱいあってショートステイでは吸収しきれないかも。

他にイッタラの工場やテンペリアウッキオ大聖堂を視察。ものづくりや祈りの場を、見せる装置に変換したセンスはさすが。もちろんそのアプローチは、ショウビズの本場ニューヨークのそれとはまったくの別物。

さて、オプションツアーで企画したパリではプロセスとしての歴史を実感。「サモトラケのニケ」や「ミロのヴィーナス」を見ては、紀元前の作品とは思えない表現力の高さに右フック。「メデューズ号の筏」や「グランド・オダリスク」では、テーマと構図の斬新さに左ストレート。カイカイキキの村上隆は、芸術史を変えたかどうかを判断基準におくキュレーター達の思考に着目し、マーケティング的なアート活動で成功をおさめたが、ルーヴルというアートの偉大なタイムマシンの中で、ドラッカーのいうイノベーション的な作品が、イコール人気作品になっている事実が村上氏の読みの正しさをものがたる。モナリザがあればほどまでに人気なのは、その永遠の微笑とともに、従来型の平面的な線描画から抜け出した発想と筆力に秘密があるという。僕達が学ぶべき伝統と革新は、ここにある。

あわただしい旅程の研修だったけれど、自立と協調の歴史を歩んできた彼の国の友人達にならい、これからも正しいと信じることに果敢に取り組んでいこう。とことん、まっすぐ 研修を積み重ねている僕達ならば、これからも進んでいけるはずだ。 ☆



到着したホテルのロビー。館内のいたるところでデザイン文化を感じる。



ヘルシンキ中央駅に改札がないことに驚き、この国の温和な人間性を知る。



映画かもめ食堂の最初のシーンに出でくるカフェ・アアルトで粹にお茶する。



ノルデックウォーキングでお洒落に街行く老人。福祉の国フィンランド。



日本のソウルフードおにぎりをヘルシンキで頬張る。これをやりたかった。



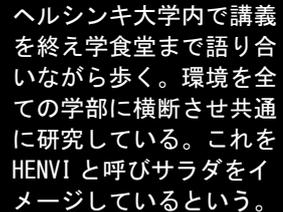
ディナークルーズで名物の巨大サーモンとじゃがいもを味わう。



TORNI 最上階の Bar から望む、白夜に美しく輝く市内の街並み。陽が沈んでもまだまだ明るい23時のヘルシンキ。



森の中で障害となる倒木をそのままにしておけば、人は倒木を避けて通るので、そこは自然の芽が育ちやすくなる。他から来た人は、これを疑問に思うので語り継いでいくことも大事という。ここにフィンランド人の物事に取り組む基本的な思想と姿勢を見ることができる。



ヘルシンキ大学内で講義を終え学食堂まで語り合いながら歩く。環境を全ての学部にも横断させ共通に研究している。これをHENVI と呼びサラダをイメージしているという。



クオリティ高いフィンランド料理を食べながら明るく笑いの絶えない時間。このあとアイスバーへ。



帰り FINNAIR 機内で観た「Unknown」でタクシードライバーが言う。「大事なのはいま何をやるかよ」



～Eriytyinen Kiitos～  
同部屋でとてもお世話になった藤井さん。映画の舞台かもめ食堂の前で。



## フィンランド・パリ研修旅行 機内アンケート

帰国の途についたセントレア行きのフィンエア機内で緊急アンケート。参加者のナマの声をどうぞ。

質問：今回の研修旅行で忘れられない〇〇は？  
Q1ことば Q2ひと Q3たべもの  
Q4とき Q5ところ Q6その他

## 平野宏司・会長

A1：「あとは全部森です」フィンランドの地図に小さく街や湖を示しながらコーディネーターのヤンナ氏曰く  
A2：パリのガイド村田さん（女性）  
老いてなおパリ案内にすべてを賭けるこの道30年のベテラン、というか仙人  
A3：①福島のお酒：ヘルシンキのバーで発見 ②ヘルシンキ中央駅で買ってみんなで食べたラズベリー5ユーロ  
A4：2日目早朝、マーケット広場の穏やかな1日のはじまり  
A5：ヘルシンキ大学内の広大な牧場  
A6：フィンエア機内食の焼きソバはホッとしました

## 大角勇雄・実行委員長

A1：「森の中で倒れた木を私たちは障害とは思っていません」ヘルシンキ大学カイザ先生の言葉  
A2：ヘルシンキの街中をノルディック・スティックで歩くおしゃれな老人  
A3：かもめ食堂のモデルになったカハヴィラ・スオミのシナモンロール  
A4：ヘルシンキ23時の白夜  
A5：ヘルシンキ大学の食堂  
A6：ヘルシンキで日本から持参した日本のソウルフードおにぎりを食べることができた

## 豊田典義・特別会員

A1：スオミ（湖）の国  
A2：レクチャーしてくれたヘルシンキ大学の院生のカイザ女史（昼食も一緒でした）  
A3：機内食のチーズ  
A4：最終日のパリの早朝  
A5：半日寝込んだヘルシンキのホテルの部屋  
A6：正体不明の添乗員竹田さん

藤井重雄・実行副委員長  
(記念研修旅行アドバイザー)

A1：「我々は倒木の存在を避けるのではなく好意的に受け止め再生させていく必要がある」カイザ先生  
A2：ヘルシンキの市場で誤って落とした吉田会員のアイスクリームに寄ってきたカモメを恐ろしい形相で追い払った屋台の叔父さん  
A3：パリのアンバサダーホテルの朝食（特にパンは美味しかった・・・）  
A4：ヘルシンキの夜？  
A5：ヘルシンキ大学の広大な敷地（枯山水庭園付き）  
A6：イッタラ社アウトレットでの案内係の女性の流麗な日本語（ただし関西系鳥取なまり）

## 豊田幸子・特別会員夫人

A1：「寝るッ！」「えっ!？」  
着いた途端、熱をだしてダウンしたダンナさんの一言  
A2：添乗員の竹田さんの目力/平野会長同時通訳がありがたかったです  
A3：パリで入ったカフェ・アンジュリーナのモンブランとフランス菓子達  
A4：ヘルシンキの長い一日  
A5：ヘルシンキで泊まったホテル近くのアンティーク店  
A6：OJBの方達の会話に笑いが止まりませんでした

## 松本正平・副会長

A1：15時に仕事が終わって、その後ゴルフに行く人もいます。（ガイドの前田さん）  
A2：モンマルトル広場でかけ事を勧誘するサギ師  
A3：クルージングディナーのでっかいサーモン  
A4：家族3人のパリでのディナー  
A5：ヘルシンキ大学の広い牧場  
A6：フィンエアでまたまたヤマトが見れた

浅野信哉・会員  
(CI委員長)

A1：Why me?  
A2：パリでホテルから劇場クレージョーホースまで運転してくれたドライバー。急がせてすいませんでした  
A3：ヘルシンキの夕食のスーブに付いてきたパン  
A4：①ヘルシンキ早朝語り合いながらの散歩  
②パリ地下鉄で豊田特別会員が乗れなさそうな瞬間  
A5：ヘルシンキ 街の坂道  
A6：添乗員さんと豊田特別会員との会話のからみがかんたん変っていったこと

## 松本瑞穂・副会長夫人

A1：豊田さんの一言  
「かもめはいつまで飛んでいるの？」  
私もそう思いました  
A2：ヘルシンキの2日目のバスの運転手さん（いつもニコニコで“キートス”と言ってくれた）  
A3：フランスパン/クロワッサン（最高においしかった）  
A4：パリの朝（お散歩が気持ちよかったです）  
A5：エッフェル塔の見えるレストラン（塔に夕日が当たりとても美しかったです）  
A6：初の海外がとてもいい所だったので、海外旅行にはまりそうです・・・  
英語が通じてうれしかったです

## 松本壮一郎・副会長長男

A1：－  
A2：モンマルトルのサギ師  
A3：昼食のフランスパン  
A4：クルージングで屋上に出た時  
A5：アイスバー  
A6：トイレの小便器の位置がとても高かった

## 吉田大助・幹事長

A1：サーモン!」（藤井歴代の一言）  
A2：旅行参加者の皆さん。意外な面や凄さを知れたり・・・  
皆さん光ってました  
A3：フィンランドの名物お菓子サルミヤッキ。とても不思議。  
A4：朝の空気（ヘルシンキ・パリ）白夜の夕暮れ  
A5：ヘルシンキの港のかもめ食堂  
A6：フィンランド人の大きさに驚きました  
パリの夕食  
帰りの機内でオレンジジュースをこぼしたこと

## 「ヘルシンキという町」 藤井重雄

短い滞在時間の中でヘルシンキやそこに住む人々について多くを語ることは憚られるが、折々に我々日本人には少ない“感覚”や“考え方”に触れることができた。

例えば駅の改札がなかったり、割り込みする人を見なかったり、何せ警官もあまり見ない。正にひとランク上の大人の街である。



その理由が歴史的にスウェーデンとロシアとの狭間にいたからか、国土の70%が森林だからか、街も人も穏やかで社会的なマナーや教育水準の高さも感じられた。

年少者や高齢者また労働階層に手厚い保障を与え、その下支えとして高い付加価値税や所得税を求めるフィンランドの考え方は、これから本格化する日本の少子高齢化対策や震災支援対策を補う一つのモデルとして制度的に参考になりうる。

ただ日本ではその制度化における国民の価値観の共有やそれに伴う精神的サポート(モチベーションの低下など)も同時に協議すべき事柄となっていくと思った。

豊かな深緑、石畳みを行く ترام、夜11時の明るい空、一つ一つが北欧の風景。目を閉じれば今でもその情景が浮かんできます。

最後に御尽力頂いた記念研修旅行委員会のメンバー、また楽しい時間を過ごさせて頂いた旅行参加者の方々にお礼を申し上げ旅行の結びとさせていただきます。キートス!!

## 「自然との共生」 松本正平

フィンランドでの初日。クルージングディナーを終えた夜の22時。ホテルに向かうバスの中から見た光景は、ベビーカーを押して子供達と広場で楽しんでいる家族の姿だった。夜の22時である。日本では到底考えられないこの時間。白夜という圧倒的な自然条件がなせる光景である。しかし、その反対の季節を考えると気が滅入る程暗い日が続くことは容易に想像できる。

ヘルシンキでの夕食は2日間ともサーモンとポテトを中心にした料理であった。あまり食事の内容にこだわらない国民性が窺える。生活を営む上で必要な栄養摂取が第一と言った所か。また道路の舗装工事も便利なアスファルトにせず、石畳をもう一度敷き詰めている。そのまま修復して、不便なままにしている。



ヘルシンキ大学での講義でも、自然を守っていくには、例えば倒れた木はそのままにしておく事だと言う。そうすれば人に踏み荒らされずに済み、自然のまま残るのだと言う。

日本も以前は自然と共生してきたはずだが、近代化により自然を征服する方針をとった。だが現在、この行き過ぎが環境問題として再考される。フィンランドでは、圧倒的な自然の脅威の前に、便利さを追求するのではなく、そのまま受け入れ、自然と共生していく姿を、今回の旅行で上記の様に随所に見せてくれた。明らかに自然条件が恵まれている日本に、それができないはずがないだろうと思われる。大きなヒントをこの研修旅行で得たことに大変感謝している。

## 「ありがとうございました」 浅野信哉

平野会長、第45周年記念旅行行き先をフィンランドとしていただきありがとうございました。恐らく自分から行くことなかったであろう国の一つのフィンランド。



この研修旅行を終えて、観光だけではないまさに研修として最高の国、教育、人たちがと確信しました。必要以上を必要としないそんな感覚を身につけた方々が暮らしている国、豊かな国を感じることができました。旅行中は流暢な外国語で幾度となく助けていただきました。第40年度に続き今だけは「やさしい英会話」中日文化センター主催に入校する気満々です。大角実行委員長、ヘルシンキ大学キャンパスで教授の講義をとても熱心に聞かれていたのが目に焼き付いています。いつも例会で熱心に聞かれている姿と同じ姿に見とれてしまい思わずシャッターを切っていました。セントレアからの出発前、何気なく緊張している中、一緒に食べたスープ美味しかったです。うれしくて思わずシャッターを切っていました。豊田特別会員ご夫妻、ご夫婦の息の合ったやり取りや仕草に感動してしまいました。後輩の未熟さを理解した上での振る舞い、理解した上での会話に尊敬。更には奥様も豊田特別会員のすべてを理解し愛を持って振る舞うさまはご夫婦の底知れぬ力を感じさせているようでした。藤井歴代、歴代が旅行に参加されると聞いて私も参加すると決めたとはいっても大袈裟ではありません。さまざまな知識を持ち合わせ、常に冷静に論ずるところは聞く者を黙らせる力が漲っています。そんな藤井歴代にあらがれ参加した研修旅行。現地でも藤井ワールド全開で有り余るパワー

に圧倒されっぱなしでした。エッフェル塔前の集合写真、歴代が肩を組んでくれました。何気ない振る舞いに感動してしまいました。松本副会長、ご家族でのご参加お疲れ様でした。大人の私でも体力的にきついスケジュールの中、ご家族揃って研修にも参加し、思い出も作られたのは、松本副会長がわれわれ会員にも気を配り、ご家族の体調、行動にも気を配られた思いやりの賜物と感じました。それに応えるように息子さんも最後までしっかりと足取りで旅行に参加されていたのはとても印象的でした。吉田幹事長、一言! お疲れ様でした! 旅行中、部屋を共にできていろんな意味で研修させていただきました! 記念旅行実行委員会の皆様、早朝のお見送り、また遥々セントレアまでのお見送りありがとうございました。いただいた鮎は現地でも美味しかったです。JTBC中部の竹田さん、とても楽しい研修ができましたありがとうございました。みるみる会員に和んでほぼ一体化していたのはさすが添乗のプロ。他にもたくさんの方々にありがとうございます。最後に家族にありがとう。妻や子供たちの理解があって参加できた研修旅行。口には出しませんがありがとうございます。

## Happiness is a journey, not a destination. 吉田大助

白夜。一日中が昼間なのではなく、昼間が長いのだ。朝の日差しと夕方の日差しは明らかに違う。港のマーケット広場で寛ぐ人は皆海を向いて座る。そんな姿に象徴されるように、ゆっくりとしていて、自然を讃えながら、限りある夏を豊かに楽しむ人たち。ヘルシンキ大学で学んだurban forestの考察に思いを巡らすと、とても納得できました。

今回の旅行では、旅行委員会、広報委員会の役割も担う覚悟で臨みましたが、なんの心配もなく、会長はじめ先輩方に先導していただき、結構冒険的に楽しむことが出来ました。また、常に写真のことを考えるのは意外と疲れますね。広報委員会の皆様、いつもありがとうございます。

そしてなにより、旅行参加者の皆様とより深く付き合うことができたことが一番の収穫でした。旅先で少しだけリラックスされた皆様は人間味が増して、とても素敵でした。この旅行がすばらしい研修になりましたのも、参加者の皆様の力が大きいと思います。

異国の空気に触れ。人の心に触れ。

「幸せは旅であり、目的地ではない」

その言葉が胸に沁みる旅行でした。ありがとうございます。

PS かもめには充分ご注意ください。



## スオミ(湖)の国を訪ねて 豊田典義

初めてフィンランドを訪ねた。ここは「スオミ(湖)の国」と呼ばれている。国土の70%が森林で水も豊かで、自然と街並みの調和が印象的である。滞在したヘルシンキは、人口57万人の都市でなるほど小じんまりとした、又落ち着いた街である。数百年前、いや一千年以上前からある「赤えぞ松」や「白樺」などの木々の中に、つまりは豊かな森の中に人々が建物を建て、住み、生活しているのである。

日本の森林は、管理された公園、又は保護区となり、悲しいかな飾られた自然となっている。だから森林と共に生活しているフィンランドの人々の生き方には説得力がある。

2日目にヘルシンキ大学の特別授業で「アーバンフォレスト(街の中の森)」について学んだ。街の中の森は、人が歩くにつれ、道が出来、やがて荒れてくる。しかし荒れた大地や倒木の下から次の自然が芽生えて来る。そんな人と森との共存の意味を教わった。

フィンランドの人々は、夕方4時ごろには仕事を終え帰宅すると言う。日が沈む10時ごろまで家庭や廻りの自然の中で時間を過ごす。最初は少しナマカワな国民性かと思い、又経済成長も優先すべきではないかと感じた。しかし2日間この国に滞在してみると、日本の生活の方が粋にはめられ、大きな機械の中でくらししているような錯覚を抱きはじめる。

いづれにしても、再び訪ねてみたい「スオミ(湖)の国」であった。



## 謝辞

創立45周年記念事業のひとつとして研修旅行を行なうにあたり、会員の皆様からあたたかいご支援、ご協力をいただきまして誠にありがとうございました。顧問ならびに財界の皆様、岐阜経済大学様をはじめ学界の皆様には示唆に富むアドバイスを頂戴しました。旅行委員会メンバー、アドバイザーをはじめ、会員ひとりひとりが旅行立案を通じて研修するよい機会に恵まれました。もちろん参加された方は大いなる収穫を得られたことでしょう。

あらためてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

第45年度会長 平野宏司